



旧兵舎時代最後の野田中生として

同窓会会長

十二期 平 口 哲 夫

創立五十周年、おめでとございます。

このすばらしい記念の年をはずさずとも同窓会の会長として迎えることになりましたが、実は、四十五周年刊行の会報『ひまわり』第一号に書きましたように、五十周年に備えて基礎づくりをするという約束で、しばらく会長を務めさせていただくつもりでおりました。ところが、多忙にかまけて後継者擁立を怠っているうちに、五十周年記念事業を直接準備しなければいけない段階を迎えてしまいました。この後に及んで辞退するわけにはいきませんので、五十周年事業の終了後、新会長を第十三期から第十八期までの同窓生中から選んでいただくという約束で、当面乗り切ることになりました。幸い、第六期の中西勝之さんが実行委員長をお引受けくださり、副委員長の若林茂樹さん（第六期）、小林弘子さん（第八期）をはじめ、各期幹事の協力のもと、実行委員会の活動が開始されました。また、顧問の松音裕之校長、特別幹事の出雲修教頭をはじめとする教職員の皆様のご指導、ご支援のおかげで、事業が大幅に進みましたことを感謝いたしますとともに、経済的不況の折にもかかわらずご厚志をお寄せくださった方々に心から御礼申し上げます。

五十周年記念誌の刊行は、同窓会名簿の刊行や祝賀会・懇親会の開催とともに当初から計画にのぼっていた重要な記念事業の一つです。しかしながら、具体的な取組みに入るのが遅かったため、企画・編集はほとんど学校側にお任せし、規模・内容も同窓会側が当初考えていたよりかなり縮小する結果になりました。短期間で対応してくださいました学校側にお詫びと御礼を申し上げます。

さて、五十周年を迎え、昭和三十三年（一九五八）入学の第十二期生としてひとはきわ感慨深いものを覚えます。と申しますのは、同期生の多くは昭和二十年（一九四五）という日本がどん底の状態に陥っているときに辛うじて生を受け、敗戦後の復興とともに成長してきた世代だからです。これに加えて、私たちの期は、野田町チ一八〇番地の旧陸軍騎兵隊兵舎（南分校）で学んだ最後の生徒であるという、特別の思い出を持っています。本校は、昭和三十四年（一九五九）に十一屋・泉野・富樫の三小学校下を通学区と定め、同年五月に菊川・新野は城南中学校へ移転することになりましたので、私たちは、二年生になって本校で学び始めたばかりだということに、新設の城南中第二期生に当る級友たちと分かれるはめになり、新学期早々に再度クラス編成の憂き目にあつたからです。

私が小学生から高校生のとしまでいた住宅は、旧兵舎時代の野田中学校舎に隣接していました。現金沢大学附属高校のプールのあるところです。当時、野田中南分校と附属高校とは運動場をL字形に囲むように併存していました。野田中がこの地を引き払ったあと、附属高校の新築工事が始まったのですが、なんと泉中の校舎が火災で焼けてしまったため、私がちょうど三年生のときに、かつて野田中が使っていた建物を泉中が仮校舎として再利用することになりました。おかげで夏休み中、建設工事のブルドーザーの唸りと泉中のプラスチックバンドの練習音にたいへん悩まされました。その経験を「騒音」と題して作文を書いたところ、これが全国作文コンクールに入選したという皮肉な思い出もあります。

旧兵舎時代の野田中・附属高校の広い敷地は、子供たちにとってこの上ない遊び場となっていました。その周辺は、その名の通り野田が広がっていて、犀川から野田山まで駆けずり回って遊んだものです。住宅に転用された多くの旧兵舎は眺望・陸寮などいろいろな名前と呼ばれており、その寮の長い廊下も雨天の日の遊び場になっていました。幼時から中学生まで大勢いっしょになって遊ぶ光景は、いまではもう見られませんが、今後とも母校や同窓のみなさまと味わい深い交流を重ねていくことができれば幸いです。